様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：82674
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2012
課題番号：24653159
研究課題名（和文）　小中学校における認知症啓発活動の評価
研究課題名（英文）　Evaluation of the class to raise awareness of dementia on elementary and junior high school students

研究代表者
深谷 太郎（Fukaya Taro）
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）
・東京都健康長寿医療センター研究所・研究助手
研究者番号：80312289

研究成果の概要（和文）：
本研究では、認知症理解のための交流プログラムを評価することを目的として、近江八幡市内の小中学校で実施されている認知症啓発授業を事例に、授業前と授業後に質問紙調査およびその分析作業を行った。認知症高齢者啓発授業自体の目的を基準にして、2 つの評価指標(①認知症に対する理解度、②認知症高齢者のイメージ)について量的分析・質的分析を行った。その結果、小中学生の認知症に対する理解度が、全体的にポジティブなものに変化するとともに、認知症に関する知識も増加したことが確認された。さらに、認知症高齢者イメージについて見ると、授業後には、認知症高齢者に対する共感的意識にもとづくイメージが特徴的に想起された。

研究成果の概要（英文）：
The aim of the present study is to explore the junior high school student’s understanding of dementia suffers and clarify the effect of the Dementia awareness class. It was found that after the Dementia awareness class, significant improvements of knowledge about elderly dementia suffers was observed regardless of experience of contact with elderly dementia suffers. Furthermore, the results revealed after the Dementia awareness class, the students exhibited a empathic concern for the dementia suffers, based on a cleaner understanding of their condition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学
・科研費の分科：社会学・細目：社会福祉学
キーワード：認知症啓発

１．研究開始当初の背景

高齢化を背景に認知症高齢者は増加傾向にあり、認知症をめぐる社会問題は後をたたない。認知症高齢者が地域で生活するには、地域全体のサポートが必要であるが、一般の人たちの認知症の症状への理解が進んでいない現状が明らかになっている。とりわけ、認知症高齢者は、その障害に対する偏見とともに加齢による偏見(エイジズム)を受ける危険性も指摘されている。大学生や看護学生を対象にした調査では、認知症高齢者に対する偏見や否定的な見方が示されている。こうした課題に対して、厚生労働省では 2005 年より地域の人が認知症を理解し認知症の人とその家族を支援する誰もが暮らしやすい地域をつくることを目的とした「認知症を知り地域をつくる 10 ヵ年」の構想を提唱している。この構想の一環として、地域の認知症サポーターを養成する「認知症サポーター100万人キャラバン」が展開されている。全国キャラバン・メイト連絡協議会では、全国自治体および企業などと共催して認知症サポーター養成講座を開催し、認知症の知識と具体的な対応を地域住民に伝える講師役である「認知症キャラバンメイト」(以下、キャラバン・メイト)を養成している。養成されたキャラバン・メイトは、講師役として、地域、職場、学校などで認知症サポーターを養成する「認知症サポーター養成講座」を開催する。認知症サポーターは、特別な活動をするのではなく、認知症を正しく理解して認知症者とその家族を支援することが求められています、現在、認知症サポーターは 3,010,050 人、キャラバン・メイトは 67,995 人(共に 2012 年 3 月末現在)を数える。近江八幡市では、「認知症サポーター養成講座」として、平成 16 年度より小中学生を対象にした認知症啓発授業を実施してきた。平成 23 年度では、市内の中学校 5 校および小学校 13 校において認知症啓発授業が行われていた。

２．研究の目的

認知症啓発授業に着目し効果検証を通してその成果と課題を明らかにすることを主目的にした。研究期間内には、①認知症高齢者理解のための交流プログラムの成果と課題を評価し、② 認知症啓発授業の課題を抽出し、認知症高齢者理解の阻害となる要因を抽出すること　の２点を行った。

３．研究の方法

2011 年 10 月から 2012 年 2 月までに認知症啓発授業を実施した近江八幡市市内の 4 校の中学 3 年生を対象に、授業前と授業後に質問紙調査を実施した。619 人の中から欠損値や不備がある回答を除き、最終的に 424 人が認知症者との接触体験、認知症への関心と知識に回答した。啓発授業の実施 1 週間前(第 1 回目)、実施後 1 週間以内(第 2 回調査)に質問紙調査を実施した。近江八幡市の啓発授業担当職員から、直接中学校側に郵送配布された。回収は研究所あてで無記名郵送とした。

４．研究成果

① 認知症理解度および知識に関して、啓発授業前の生徒の認知症理解についてみると、認知症高齢者との接触経験のある生徒の方が経験のない生徒よりも、認知症に対する関心および「症状知識」や「ケア知識」が有意に高いことが示された。啓発授業後についてみると、認知症高齢者との経験の有無にかかわらず、認知症知識が有意に高くなることが認められた。また、授業の感想文の分析からも、事前の知識や経験の差が授業をどのように受け止めるかに影響していることがうかがえた(表 1)。

表 1．認知症者との接触あり群と接触なし群の認知症知識得点の比較

		啓発授業前 (n=413)	啓発授業後 (n=413)	ANOVA(F値)		
		mean（SD）	mean（SD）	接触体験	啓発授業	交互作用
概念的知識得点	接触あり	3.21（1.38）	3.71（1.52）	1.60	33.99 **	2.41
	接触なし	2.85（1.59）	3.71（1.47）			
手続き的知識得点	接触あり	1.76（0.96）	2.48（0.83）	5.95 *	183.48 **	8.93 **
	接触なし	1.34（1.03）	2.46（0.78）			
全体得点	接触あり	4.98（2.02）	6.19（2.07）	3.78	100.83 **	5.81 *
	接触なし	4.19（2.29）	6.18（1.98）			

*$p<.05$ **$p<.01$

② 認知症イメージについてみると、授業前には高齢者の老化を表すイメージ(例えば、「身体機能の低下」「加齢」)や認知症を忌避するイメージ(例えば、「近寄りがたさ」「危険」)が特徴的に想起された。授業後には、認知症の知識(例えば、「り患率」「能力の保持」)および認知症高齢者に対する共感的意識(例えば、「助けてあげたい」「憐み・共感」)にもとづくイメージが特徴的に想起された(図 1)。

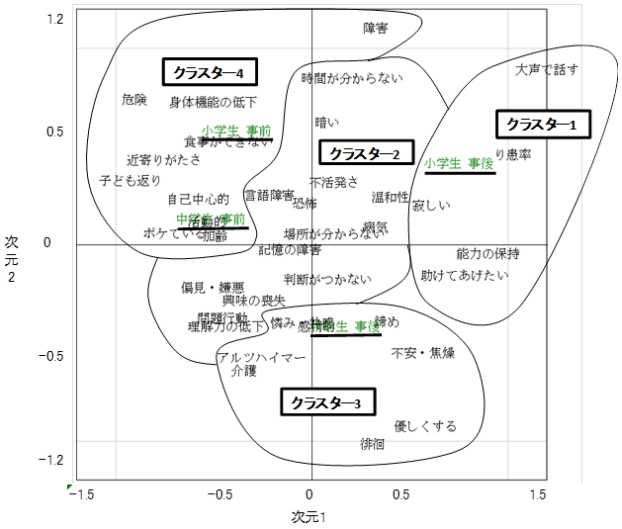

図1．コレスポンデンス分析とクラスター分析の結果

③ 今後の認知症啓発授業の課題として、キャラバン・メイトとの相互交流を通した小中学生の主体的な授業への参加により、認知症に関する「知識」の獲得に止まらず、認知症高齢者に対する「共感的意識」を醸成することに焦点をあてたプログラム作りが、認知症教育の核になる側面であることが推測された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 村山陽、小池高史、倉岡正高ほか、認知症啓発授業が小中学生の認知症高齢者イメージに及ぼす影響：テキストマイニング手法による分析、日本認知症ケア学会誌、査読有、12巻、2013、（印刷中）

(2) 小池高史、村山陽、倉岡正高ほか、中学生を対象とした認知症啓発授業の効果：ビデオ感想文に使われた呼称に着目して、日本世代間交流学会誌、査読有、3 巻、2013、(印刷中)

〔学会発表〕（計 6 件）

① 村山陽、小池高史、鈴木宏幸ほか、小中学生を対象とした認知症高齢者イメージの内容分析：近江八幡市における認知症教育の取り組みより(その1)、第21回日本健康教育学会、2012. 10. 25

② 小池高史、村山陽、鈴木宏幸ほか、小中学生を対象とした認知症高齢者イメージの内容分析：近江八幡市における認知症教育の取り組みより(その2)、第21回日本健康教育学会、2012. 10. 25

③ 深谷太郎、小林絵里香、小中学生を対象とした認知症高齢者イメージの内容分析：近江八幡市における認知症教育の取り組みより(その2)、日本社会福祉学会第60回秋季大会、2012. 10. 21

④ 深谷太郎、小林江里香、西真理子ほか、高齢者の独居・閉じこもり・孤立がＡＤＬ低

下に与える影響、第 54 回日本老年社会科学学会大会、2012.6.10

⑤ 村山陽、小池高史、倉岡正高ほか、認知症啓発授業が生徒に与える影響(その1):認知症高齢者イメージおよび認知症高齢者知識の変化に注目して、第54回日本老年社会科学学会大会、2012.6.10

⑥ 小池高史、村山陽、倉岡正高ほか、認知症啓発授業が生徒に与える影響(その 2):ドキュメンタリービデオ視聴感想文の分析、第54回日本老年社会科学学会大会、2012.6.10

６．研究組織

(1)研究代表者

深谷　太郎（Fukaya Taro）
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究助手

研究者番号：
80312289

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

村山　陽（Murayama Yoh）
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・非常勤研究員

小池　高史（Koike Takashi）
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・非常勤研究員